

2013年10月24日 熊本学園大学、水俣学講義レジメ

「ドキュメンタリー映画は被写体を鏡に、みずからの持つ、規定概念をくつがえし、新たな価値観の創造へ乗り出す船である。」(小林)

小林茂・ドキュメンタリー映画監督

1954年新潟県生まれ。同志社大学法学部卒業。学生時代から足尾鉍毒事件、水俣病事件の被害者たち、ハンセン病の療養所の人々、障害者の人々と交流・支援活動をする。「福祉」を問いつけた故・柳澤寿男監督の助監督を経て、ドキュメンタリー映画「阿賀に生きる」(佐藤真監督)の撮影により日本映画撮影監督協会第1回JSC賞受賞。映画は当時としては異例の劇場ロングラン公開され、国内外の映画賞を多数受賞。一方、自身での監督・撮影作品として、障がいのある子どもを受け入れる学童保育所「つばさクラブ」を描いた三部作「こどものそら」(1997~2000年)を発表。続く2001年には重度障がい者の佐藤正尋さんと介助者たちの日常を描いた「ちょっと青空」を発表。

2002年、脳梗塞で倒れるも、重症心身障害児(者)施設びわこ学園を舞台にした映画「わたしの季節」(2004)を発表。文化庁映画大賞、毎日映画コンクール記録映画賞など受賞。また、透析をしながらアフリカのストリートチルドレンの映画「チョコラ！」(2008)を制作。全国公開と並行してケニアの「子どもたちの家」建設キャンペーンをおこない、2010年完成。現在は新潟県の豪雪地域を舞台に「風の波紋」を制作中。長岡市が制定した「米百俵賞」を2013年度受賞。著書に「ぼくたちは生きているのだ」(岩波ジュニア新書)「チョコラ！ アフリカの路上に生きる子どもたち」(岩波ブックレット)、「グラフィック・ドキュメント・スモン」など。新潟県長岡市在住。

ごあいさつ

「学生時代の頃を話してくれればいいから」といわれ、新潟からおじゃましました。新潟から関西の大学に進学し、水俣に出会わなければ、まったく違った人生になったのではないかと思います。今年の春も患者さんたちが作った無農薬の甘夏みかんの自主販売をしました。合計180箱でした。二十歳の頃、京都・水俣病を告発する会で最初に扱った甘夏は34箱。それもスス病で真っ黒でした。あれから38年になります。年はとりましたが、あの青年時代と心はそんなに変わっていないような気がします。

水俣へは、足尾鉍毒事件の現場を訪ねたことから、「公害は現地から」という宇井純の言葉が本当だと思い、自分の目で、広島や長崎、水俣を見てみようと、一人で旅に出たのです。その頃のことを書いたものがありますので、採録します。

(岩波ジュニア新書「ぼくたちは生きているのだ」から)

水俣へ

さて、水俣にいかにして入ったらいいか。熊本の水俣病を告発する会に電話したら「サムライの家」を紹介された。おっかない名前だ。

鹿児島本線が水俣駅に近づく。右手に海が広がった。不知火海だ。見慣れた日本海からは想像ができない。波もなく鏡のような海だった。うつくしい。「これが水俣病の海か」。天草が手にとるように近くに見えた。

水俣駅を降りると目の前にチッソ株式会社の正門がみえ、巨大コンビナートが広がった。水俣市はチッソ城下町。水俣病はチッソが排出した工場排水に含まれるメチル水銀が食物連鎖をへて魚に蓄積され、それを食べた人間が発病した公害病である。(略)

紹介されたところは丘陵地にある小さな家だった。支援者たちが住みついている「侍の家」だった。侍は地名だった。全国からぶらりと来たような私みたいな若者が何人もいた。若者同志どんな話をしたのだろう。畑仕事を手伝って一週間滞在した。

あるとき、山口県からきた青年と畑仕事をしていたときのこと。

「ところで小林くんは、なんで水俣に来たの？」と聞いてきた。

「はあ、一度、水俣病の患者さんに会ってみたいと思ひまして」と私がいうと、

「それなら、いま、あそこを歩いている人も患者さんだよ」

と遠く丘の道を歩いている人を指差した。

「・・・あの方が患者さんですか」

私の最初の訪問はそんなものだった。何をしてもいいかも分からない。現在進行中の公害事件に足を踏み入れることもできず緊張していた。熊本地裁で争われた水俣病裁判は1973年3月、患者側の勝訴で確定していた。判決一周年記念の「判決勝利集会」がチッソ正面前で開かれた。また、患者さんたちの活動と憩いの場として水俣病センター相思社の設立(73年4月)を目前にしていた。

「同志社に水俣市出身で支援活動をしている江口くんというのがいるから、会ってみるといいよ」という言葉をみやげに、水俣を離れた。天草から長崎へ上陸。山陰線で京都にたどりつくつと、大学2年の新学期を迎えた。1974年の春である。

ドキュメンタリー映画との出会い

4月は新入生向けのオリエンテーションの期間だ。学内ではいろいろな映画が自主上映されていた。資金稼ぎのときでもある。

学生会館で「水俣」の映画が上映されたので見に行った。土本典昭監督「水俣シリーズ」との出会いである。その作品は「水俣——患者さんとその世界」(1971年)年と「水俣一揆」(1973年)だったと思う。

「水俣」の支援活動へ

(略) その集会に参加した。水俣で暮らしていた人びとが関西地区に移住。その後、水俣病を発病。水俣病の認定をもとめる未認定患者の支援集会だった。

集会が終わると、自然と後片付けを手伝い、誘われるままに「打ち上げ」にも参加した。酒瓶を2升ぶらさげて、夕暮れの鴨川の河川敷で車座になって飲む。酔いがまわると歌が飛び出した。朗々とした声の持ち主が越路吹雪の「愛の賛歌」を歌い、勢いあまって川に倒れこもうとするところを私は支えた。ともに水俣病患者の支援活動をすることになる友

人との出会いである。

(略) これ以後、私は「京都・水俣病を告発する会」のメンバーとして活動することになる。学ぶ場所という意味でいえば、「水俣」は私の大学だった。京都発熊本行きの夜行急行「阿蘇」に何回乗ったことだろう。最初の水俣訪問から半年、今度は直接患者さんたちと会い支援活動に入っていった。

73年の熊本地裁の判決は原因企業チッソの責任を認め、その賠償を命じた。以後、水俣病の認定申請は急増した。しかし、国、県はそれを認めなかったために、大量の「未認定患者」が生み出された。

そのような背景のなかで、患者たちは「行政不服審査請求」を起こしていった。私たちはその代理人として闘った時代だ。

次から次へとさまざまな裁判が提起された時代でもある。患者リーダー川本輝夫さんが抗議行動の中で、逆に「暴行事件」をでっちあげられた「川本裁判」まであった。

水俣病事件の歴史は足尾鉍毒事件の歴史と似ていた。富国強兵・殖産興業の国策のもとで、政府が足尾銅山を擁護したように、化学工業の発展、高度経済成長という戦後の国策のもと、政府はチッソを擁護した。どちらも民衆の生命、財産はないがしろにされた。

水俣の生活を体験すれば、患者さんたちは本来自然と共存した穏やかな生活であったことがわかる。山育ちの私が食べたことがない獲れたての魚のおいしさ。「米のかわりにどんぶりいっぱい魚を食べました」という患者さんの言葉は最初信じられなかったが、実際、そうであった。「タイ、チヌ、太刀魚(タチウオ)、ボラ、タコ、ガラカブ、キビナゴ……」と数え切れない魚の種類。

患者たちは海が見える山でみかん栽培をしていた。「自分が毒でやられたのだから、農薬をかけたくない」という人が出てきた。農薬を基準どおりに散布しなければ、農協にはひきとってもらえない。

「それなら、農協を通さない自主販売をはじめよう」ということになり、京都にもその要請が来た。「学生の身分で、長いつきあいになる消費者と直接つきあっているのか」という議論もあったが、その生き方に共鳴し、やってみようということになった。

運動の支援者たちに「無農薬甘夏の自主販売」を呼びかけた。最初、水俣から取り寄せたのは34箱だった。現在のようにトラック便があるわけではない。国鉄(JR)便で運ばれてきた。ダンボールを開けると、真っ黒にすすけた甘夏みかんが出てきた。これには驚いた。スス病ということらしい。味は芳醇で適度な酸味があっておいしい。タオルで一個一個拭いて配達した。

みかんの木が有機肥料によって強くなり、だんだんときれいな皮になっていった。数も600箱をこえた。温州みかんも手がけた。水俣の「思い」と「近況」をのせて、近畿一円を走り回った。

新潟県に引っ越した今でもわが家に毎年40～50箱の甘夏がやってくる。私はその皮で一年分のマーマレードを作る。